様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 26 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2007～2008
課題番号：19820045
研究課題名（和文）　生命倫理学における尊厳死言説と「死の教育」の歴史的・社会的関連性に関する基礎的研究
研究課題名（英文）　Basic Research on the Historical and Social Relationship between Discourse of Death with Dignity in Bioethics and Death Education

研究代表者
大谷　いづみ（OTANI IZUMI）
立命館大学産業社会学部・教授
研究者番号：30454507

研究成果の概要：
本研究は(1)研究システムの構築、(2) 言説解析のための諸資料の蒐集・蓄積・整理、(3) その一部の解析を行った。成果として、第一に、現在の若者論が「尊厳死」言説と自分探しの関係を射程に入れておらず、生と死の教育との関連性についても解析が必要であること、第二に、第二次世界大戦後の欧米の安楽死論は、キリスト教倫理に対抗する自殺権の主張として行われた一方、治療中断についてはカトリックの医療倫理などが導入されるなどの影響が強く、生命倫理学も例外でないことを指摘した。この錯綜と自殺予防を謳う現在の死の教育におけるキリスト教との関連性の考究は今後の課題である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	790,000	0	790,000
2008 年度	540,000	162,000	702,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,330,000	162,000	1,492,000

研究分野：哲学、倫理学
科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学
キーワード：尊厳死、生と死の教育、自分探し、若者論、自律原則、生命倫理学、死生学、自殺、

１．研究開始当初の背景

今日の「生死」をめぐる問題群は,「(患者の)自己決定（自律)」の原理に基づく「自分らしい生と性と死」という語りを基底にしており, 1960-70 年代に米英英語圏を中心にした生命倫理学・死生学の成立が, ライフスタイルの自己決定権を要求する同時期の「新しい社会運動」

の潮流と無縁ではないことを示している。しかし,「自分らしさ」の希求は，選択的中絶や「尊厳死」における議論においてしばしば見られるように，質によって生命を序列づけ，質が低いと見なされる生命は生まれなくても，死にゆかせても「やむを得ない」，という語りに収斂していくようにも伺える。

筆者は本研究を日本における生命倫理学史に位置づけ，筆者が数年来たずさわっている「尊厳ある死」の編成過程に関する研究において,「尊厳ある死」の言説の生成と日本における生命倫理学の導入・展開の歴史との関係を考察してきた。筆者はまた，長年高校倫理教育において，アイデンティティとの関連で生命倫理問題の教育実践に携わってきた。その教育研究の成果をふまえ，本研究では,「自分らしさ」を希求する自分探しの文脈で「尊厳ある生／死」をめぐる言説と「死の教育」をめぐる現象との関連性に着目してこれを考究するに至った。

２．研究の目的

本研究では,「尊厳死」が「安楽死」と切り分けられて来た戦後日本の「安楽死・尊厳死」論に関する応募者のこれまでの歴史研究をふまえ, 生命倫理学における「自分らしい、人間らしい、尊厳ある死」を希求する「尊厳死」言説の生成・展開と自己決定の原理と権利との関連,「生と死の教育」における「生・老・病・死」の語られ方との歴史的・社会的関連性を解析するために，その基礎資料を蒐集・分析した。本研究を基礎的研究として,「よき死」「尊厳ある死」に対置される「悪しき生」「尊厳なき生」という表象によってこぼれ落ちてゆく,「老い」「病」「障害」をもつ人々のさまざまに豊饒な生を掬い取るような新たな「生・老・病・死」の語りを生命倫理学において再構築するとともに，さまざまな生き難さのなかで時に「自分探し」に閉塞した現在を生きる子ども・若者に向けた「いのちの教育」への再編を企てるものである。

３．研究の方法

上記の研究目的にしたがって、以下の方法をとった。

(1)　資料蒐集のための基本的な環境整備を行った。具体的には、映像資料などの蒐集・蓄積と解析のための機材（コンピュータとDVD・ハードディスクレコーダー、高解像度の複合プリンタ等）を整備し，研究システムを構築した。

(2)　「尊厳ある生／死」の言説が表出される場として想定されるさまざまな材料の蒐集と蓄積を行った。蒐集の対象とした資料は以下に分類される。

① 生命倫理学における自律原則の言説の変遷を考究するための内外の文献資料

② 「尊厳ある生／死」に関わるさまざまな「当事者」の手記。

③ 「死」をあつかった映画やＴＶドラマ，演劇などのＤＶＤや文学作品，漫画など。

④ 「生と死」「いのち」を主題とする教育に関する資料。

⑤ 若者論に関する文献。

(3)　蒐集した資料を整理し、その一部の解析を行った。解析にあたっては、「自分らしさ・自分探し」をキーコンセプトとした。

４．研究成果

本研究は２つの側面を持つ。第一に、安楽死・尊厳死論の歴史において生成されてきた「自分らしい、人間らしい、尊厳ある死」という表象と生命倫理学における自律原則との関係性を考究すること。第二に、「自分らしさ」の希求と、「自分らしい、人間らしい、尊厳ある死」の言説、とりわけ、「死の教育」

の生成・展開との関係性を考究すること、である。その方法については、前項で示したような多方面多分野にわたる資料を、「自分らしさ」「自分探し」をキーコンセプトに解析しようとするもので、膨大な資料の蒐集と、その整理・解析のための膨大な作業を必要とする。

「基礎的研究」という名称が示すように、本研究は、筆者が構想する息の長い研究のごくスタートラインに位置する。とりわけ、研究者としての１年目にあたる 2007 年度は、本研究のための研究環境と研究システムの構築に相当の労力を費やすことになった。蒐集した資料も、ごく一部であるといわざるをえない。

しかしながら、2 年の研究期間の成果として以下の 2 点を上げることができる。

(1) 関連諸資料の蒐集と蓄積を継続する中で、とりわけ若者の自殺にかかわる諸資料と文献、さらに若者論の基礎文献を中心に収集・整理・解析する中で、

① 現在の若者論が、スピリチュアリティ・ブーム、ロスト・ジェネレーション、自分探しとの関係を十全に射程には入れていないこと

② さらに、「生と死の教育」が現在の若者をめぐる現象をどのように見立てているか、あるいは、両者がどのような関係を持つか、その歴史的社会的解析が必要であること

が明らかになったことである。

この点に関しては、まだ萌芽的な問題認識の段階であるが、現状での成果として、雑誌論文 2)、学会発表 5)、6)　図書 2)の 4 点がとくに挙げられる。

(2) 筆者が数年来継続して行っている尊厳死言説史について、死生学の言説はもちろんのこと、生命倫理学においてもキリスト教の影響が強いことにあらためて着目した。とくに、生命倫理学の先駆者といわれるジョセフ・フレッチャーが、生命倫理学胎動期ともいえる 1960 年代に日本に１年間滞在してキリスト教社会倫理を講じたことが判明した。また、刑法学者宮野彬が 1970 年代初頭に日本に紹介した“anti-dysthanasia”概念がフレッチャーによるものであることも明らかになったが、そのフレッチャーは、1950 年代初頭に、当時のキリスト教倫理と対抗する形で安楽死を選ぶ権利としての自殺権の主張を行っている。この論理はフレッチャーに限らず、その後の生命倫理学の死の自己決定の系譜に連なるものである。他方、治療中断についてはカトリックの医療倫理の原則や教皇談話が導入されるなど、生命倫理学においてもキリスト教の影響が色濃いことを指摘した。この錯綜と、自殺予防を謳われる死の教育におけるキリスト教の関連性との考究は今後の課題である。

この点に関する成果としては、とくに雑誌論文 1)2)、学会発表 4)、図書 4)のほか、現在１点の図書（分担執筆）が準備されている。

なお、(2)は、2009（平成 21）年度より基盤研究（C）「生命倫理学における安楽死・尊厳死論のキリスト教的基盤に関する歴史的社会的研究」において発展的に継承される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

1) <u>大谷いづみ</u>2008「安楽な死・尊厳ある死」の位置取りをめぐって」『Pharma Medica』

26(7): 47-51、査読無。
2) 大谷いづみ2008「安楽な死、尊厳ある死――の遙か手前で」『現代思想』36-2: 174-183、査読無。

〔学会発表〕（計 7 件）
1) 大谷いづみ「医療崩壊と医療倫理――＜間（あいだ）＞の生のために」石巻赤十字病院職員研修会 2008/02/15 石巻赤十字病院
2) 大谷いづみ「安楽死から尊厳死へ？――安楽死・尊厳死論を読み直す」難病と倫理研究会第２回京都セミナー2008/02/02 キャンパスプラザ京都
3) 大谷いづみ「「問い」を立て直す～「生と死の自己決定」をめぐって」第９回福祉教育研修講座 2008/01/12 法政大学市ヶ谷キャンパス
4) 大谷いづみ「「尊厳死」言説の誕生とキリスト教の関わり――試論のための覚え書き」京都ＮＣＣ生命倫理研究会例会 2007/09/22 京都ＮＣＣ宗教研究所
5) 大谷いづみ「「尊厳ある死」という思想の生成と「いのちの教育」」第２８回ＳＧＲＡフォーラム in 軽井沢「いのちの尊厳と宗教の役割」2007/07/21 鹿島建設軽井沢研修センター
6) 大谷いづみ「「よく生きる」ことと「よく死ぬ」こと―「尊厳死」研究と「いのちの教育」の狭間で」第１２回日本緩和医療学会シンポジウム２「緩和医療を支える倫理と法」2007/06/23 岡山コンベンションセンター
7) 大谷いづみ「「よく死ぬ」ことと「よく生きる」ことの「間」――「尊厳死」言説をめぐって」立命館大学土曜講座 2007 年 4 月「「生存学」の創成 ――障老病異と共に暮らす世界へ」2007/04/14 立命館大学末川記念会館

〔図書〕（計 4 件）
1) 大谷いづみ他 2009 安部彰・有馬斉編 2009 年 3 月『生存学研究センター報告 8：ケアと感情労働－異なる学知の交流から考える』立命館大学GCOE創成拠点＜生存学＞（大谷分担箇所「国際交流企画」II「研究交流会」発言, pp.100-126）生活書院
2) 大谷いづみ他 2009 他立命館大学生存学研究センター編『生存学』（分担執筆　大谷いづみ他「生存の臨界I・II・III（座談会）」pp. 6-22,112-130,236-264）生活書院
3) 大谷いづみ2008 島薗進他編『死生学１　死生学とは何か』（シリーズ・死生学第１巻）（分担執筆「生権力と死をめぐる言説」pp. 53-73）東京大学出版会
4) 大谷いづみ2008 上野千鶴子他編『ケアという思想』（シリーズ・ケア　その思想と実践　第１巻）（分担執筆「生きる権利・死ぬ権利―だけでなく」pp.195-210）岩波書店

〔その他〕
http://devita-etmorte.com/index.html
http://www.arsvi.com/index.htm

６．研究組織
(1)研究代表者
大谷 いづみ（OTANI IZUMI）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号： ３０４５４５０７

(2)研究分担者

(3)研究連携者